

第二章 バンク誕生



一九八九年になってすぐ、和暦が昭和から「平成」に替わった。一月八日である。名古屋骨髄献血希望者を募る会へのドナー登録者数は、着実に増えていった。

名古屋骨髄移植グループは、HLA（A・B座）検査済みの登録者が五百人程度になれば、患者のHLAデータとの検索を開始してコーディネーションに移りたいと考えていた。八八年末までに葉書による登録者が五百人を突破し、問い合わせも九百人近くに上る状況を見て、バンク設立への具体的な準備作業が始まった。

三重の協力と患者登録開始

八九年一月の終わりから取り組まれたコーディネーター用マニュアルづくりの、中心になったのはバンクの運営委員長に就任する名古屋大学第一内科講師の森島泰雄さん（四七） Ⅱ現・名鉄病院第二内科部長Ⅱである。

「二週間に一回の集まりでしたが、毎回、夜中の十二時ごろまでかかりましたね。医師だけでなく、血液センターの人や弁護士にも出席をお願いし、とくに最終同意書の文面については弁護士の協力を得ました」

バンク発足以前から法律家を内部に取り込んだことは、その後のバンク発展を考えるうえで的確な判断だった。参加したのは、バンクで理事を務めることになる串田正克さん（四二）だ。東京で骨髄バンク運動に取り組んでいた宮田信男弁護士が、大谷さんからの要請に従って適任者を探して

いたところ、医療過誤問題に詳しい串田さんに白羽の矢が立ったのだ。

「初めは募る会とのかかわりでした。組織や規約づくりをどうしたらいいかといった相談を受けたんですが、私自身は骨髄移植の知識は全くなかったんですね。そこで、八八年十一月に開かれた第二回のシンポジウムに出席しました。まず驚いたのは、移植とはいっても輸血のようなものである半面、ドナーには全身麻酔による数日の入院が必要だということでした。もっと驚いたのは、病気で悩んでいる患者さんに骨髄を提供してもいいと考えている人が数多くいたことなんです。シンポジウムでは、一日も早くバンクの設立を待ち望む患者家族の突き刺さるような熱い視線を強烈に感じました」

バンク設立を熱望するのは患者家族ばかりではない。しかし、串田さんは法律家としての立場を失わなかった。

「ある意味では弁護士の宿命とでもいいますか、勢いに任せて走り出そうとする馬の手綱を引き締める騎手のような感じでした。明日にでもつくってほしいというのを、もう少し待ちなさいと言ってきたわけです。大谷さんに相当せつかけられると覚悟したので覚えています」

骨髄バンクについて、設立を熱望する声がある一方で、骨髄移植そのものに疑問を呈する人々も、医療界にすらいいたのである。せつかくの組織を失敗に導いてはならず、しかも批判的な意見に対して確固とした論陣を構えておく必要もあった。

串田さんよりも先に、いち早く名乗りを挙げた強力な「助っ人」が、税理士の三品雅義さん（四

一」である。募る会の発足が新聞で報じられてすぐだから、季節柄、文字どおり「飛んで火に入る……」そのもののグッドタイミングだったのだ。

「家族で一週間の海外旅行に出かける直前に、新聞を見たんです。帰ってきたらアクションを起こそうと思って、とりあえずその日のうちに登録だけはしておきました。帰国してカバンを整理していたら二万円出てきたんですね。何かのときの予備にとつてあったものですから、まあ、なかったことにしておこうと考えて、募る会に送りました」

まさかそれが、東海骨髄バンクとのつながりになるとは夢にも思わず、三品さんは会計事務所の封筒をそのまま利用したのだ。

「すぐ連絡がきました。お金の扱いについて、アドバイスがほしいと。森島先生と大谷さんに会って、財団法人か社団法人のような形ができるかどうかという話を含めて、いろんな話題が出たんですが、まあ私で役に立つならと引き受けた次第です。具体的には第一回のシンポジウムのお金の管理から、仕事が始まりましたね」

仕事とはいっても、当然のように無償のボランティアだ。バンク設立後になるが、月に一回の運営委員会にも、会計担当として出席してきた。この際、その雰囲気も語ってもらおう。

「組織論についての、ナマの勉強になりました。少数意見が結構とおるのが面白かったですよ。多数意見がほぼ出そろって落ち着いたころ、そういえばこういう方法もあるんじゃないか、なんて意見が出て、それが最終結論になることが、ありましたから」

各地に「○○ちゃんを助ける会」といったグループが、そのころずいぶんできていた。骨髄バンクがないのだから、患者家族や関係者は、やむにやまれぬ思いから結成したのだ。しかし、中には集まった浄財をプライベートに流用して、会が崩壊したというような話もあった。

「たとえ一円でも、善意のお金をいただくのですから、支払いのほうのチェックは厳しすぎるくらいやりましたね。入ってくるお金は十万円や二十万円の単位ではなくて、何千万円にもなりませんでした。素人だけでは管理しきれなかったと思います。それにしても、実際にこんなに高額なお金を扱うとは、予想もしていませんでした」

とにかく日常の仕事が、税金を一円たりとも取りはぐれないように目を光らせる税務署を相手に、きちんと対応できる書類を整える税理士だけに、東海骨髄バンクの決算期になると、残高証明書までそろえる徹底ぶりである。

「ボランティアの中には、すべて自腹を切るという人もいて、そういうのが意外とこちらとしては困るんです。本当は交通費などは、きちんと請求してもらおうのが一番すっきりするんですが、ドナーでも近場だと請求しない方もいましたね」

ところが、ところが、である。なんと、東海骨髄バンクで理事に就任する三品さん自身が、ドナーになってしまったのだ。詳細は第四章の「ドナー群像④」で紹介したい。

弁護士と税理士を内部に抱えれば、これほど心強いものはない。それも、バンクが発足する以前からかかわってもらったのだから、組織を支える力は、見えないところで強固になっていったので

ある。

二月には、岐阜県内でもHLA採血がスタートした。

さらに、三重県でもボランティア団体結成の動きが始まっていた。三重の場合は、患者家族の願いが発端である。

津市の県職員、海住康之さん(四七)の長女千華子さんが、中学二年だった八八年六月、修学旅行が近づいているというのに風邪が治らない。近くの医院に行ったらところ三重大学病院を紹介され、検査の結果、慢性骨髄性白血病と診断された。

海住さんと妻淳子さん(四二)は、悶々とした日々を過ごしたが、情報がなければ打つ手もないと、発足したばかりの名古屋骨髄献血希望者を募る会のシンポジウムなどに参加して、どうすればいいかの方法を探った。その結果、職場の同僚に打ち明けたのが、年の暮れだった。

「娘のために何かをしてやるのが、親の務めだと思いました。でも、運動を始めるにはうちの子だけではないと、その点ではクールでしたね。娘のことを前面に出していれば、別の形でドナーはもつと集まったかもしれません、がこのだれでも助けてもらえる運動にしようと考えました」

千華子さんの病気を打ち明けた相手が、三重のボランティア活動で先頭を切る庄司正さん(四四)Ⅱ現・勇気の会事務局長Ⅱである。庄司さんは海住さんと同じ職場の県職員で、千華子さんにスキームの基礎を教えるなど、家族ぐるみの付き合いだった。

「でも、お父さんが運動を始めると、『娘のためだからだろう』と言われかねないので、それなら私が出していいかと決めました。大谷さんに連絡をとり、暮れに名古屋駅前のホテルで開かれた、募る会の忘年会に出させてもらったんです。そこで、今で言うバンク運動の理念といったものを教えられ、年明け早々から活動を始めることにしました」

庄司さんが具体的に教えられたのは、HLAの検査態勢、大学病院の応援、そしてボランティアの必要性だった。幸いなことに、三重では初期のうちにこれらの条件をクリアできる条件が整っていた。

「海住さんの叔父が、県医師会の副会長でした。そのルートから三重大学小児科の櫻井實教授にコンタクトがとれたのが、幸運の第一ですね」

幸運の第二は、海住さんと庄司さんが薬務食品環境課勤務だったことだ。

「課のある保健環境部は献血行政をやっていますから、成分献血事業と一緒に、なんとかHLA検査ができないものかと考えました」

ところが、日赤の血液センターを訪れたら、どうも対応が芳しくない。いかにも突飛なことをやろうとしているかのように受け取られたのだ。

「センターの所長に会いに行ったとき、本当に涙を流しましたよ。だって、われわれは献血を一生懸命やってきたわけですよ。その職員の子どもがこういう境遇に置かれているのに、きちんと対応してくれないのが情けなくなってるね」

所長の木村邦夫さんは、初めからかたくなな対応をとろうとしたわけではなかったもので、庄司さんらの涙を見てたちまち決断した。

「HLAのデータは、成分献血をすることによって、提供してもらえなくなったわけです」

三重の優れた点は、ボランティア団体が献血運動にもとても熱心なことだ。人口は百八十万人をわずかに超える程度の三重県が、血小板の供給量で全国のベスト5に入っていることが、それを如実に物語っている。ちなみに、成分献血ドナーに向けて「献血ありがとう」というパンフレットを作成した。骨髓移植を受けた患者や家族が、移植後の成分献血のありがたさを書いており、これが成分献血希望者にいたく感銘を与えたという。

「バンク活動を進めるための条件のうち、残りはボランティアが頑張ればいいわけですから、必要条件は三つともクリアできたことになりました」

しかも、ボランティア団体の事務局を、薬務食品環境課に隣り合った三重県かまぼこ組合の事務所に置いてもらえることになったのだ。組合事務員の加藤美智さん（四六）が、ボランティア団体の事務局員を兼ねてきたのだから、これほど力強い縁の下の力持ちはない。

庄司さんらが「三重県骨髓献血希望者を募る会」を結成したのは、八八年十二月だ。翌八九年五月に三重で初めてのシンポジウムを津市農協会館で開催した。これが実質的な旗揚げである。

「名古屋を中心にした愛知県だけだと、バンクに『東海』の名称が使えなかったと思います。われわれや岐阜、それに静岡が加わったからよかったですよ。三重が、単独でもバンク機能を持つ

るようになってきたので、われわれがドナーを集めてくれば、あとは東海骨髓バンクがフォローしてくれる態勢ができて、全体としてうまく機能してきたのだと思います」

時間ははずつとあとになるが、三重県骨髓献血希望者を募る会は九二年六月、「勇気の会（三重県骨髓バンク推進連絡会議）」に発展して解散した。東海骨髓バンクのドナー・患者登録がその年六月いっばいで受け付け停止となった半面、日本骨髓バンクが六月から患者登録も受け付けるため、「勇気の会」は県の骨髓バンク推進組織の委任を受けて、専門部会活動を担うことになったからだ。

三重県在住の患者には、東海骨髓バンクでの適合ドナーはいなかった。しかし、五十五人のドナーのうち、三重県在住者は四人いる。また、ほぼ四年間の活動によって、三重県内の登録者（HLA検査済み）はバンク全体の一角に当たる約三百人を占める。募金活動や寄付などで、約七百万円を集めた。

「三重では、官民一体で非常にうまくいきました。それに、血液センターの協力が大いに助かりました。地域のボランティアがいかにセンターと上手に付き合うかで、評価されますから、全国的にも血液センターと仲良くやってほしいですね」

運動の発端となった海住千華子さんは、短大に合格したものの、一度も通学することなく九三年七月一日、十九歳で死去した。

三重県で初のシンポジウムが開催される直前、名古屋骨髓移植グループの医師が中心になってつくれた「骨髓バンク委員会」が、患者登録を公表した。五月十五日のことである。内々には受け付

けていたが、待ちに待った本格的な登録開始とあって、マスコミも取り上げた。

「マニユアルは四月半ばまでにどうやら出来上がったんですが、かなり詰めたつもりでも不安があまりましたから、一カ月くらいは試用期間に充てました」

医師が抱えている「身内の患者」によってシミュレーションしてみたのだ。どうやら「いける」という感触を得たうえで、患者登録公表だった。

六月にはA・B座を検査済みのドナー登録者が、四百四十人に達していた。

待望のバンク設立

東海骨髄バンク設立への準備は、八九年一月から始まっていた。時期としては、コーディネートマニユアルの作成から患者登録の受け付け初期に当たるから、それらと並行しながらバンクの形が少しずつ整えられていったわけだ。運営委員会形式をとって、関係者がさまざまに協議をつづけた。「全米骨髄バンクの全容もわかってきましたから、できるだけそれに近づける形のバンクをつくりたいという希望がありました。それには、医療サイドだけでは不可能ですし、まず血液センターの協力をどうとりつけるかが課題でした」

マニユアルづくりに取り組んでいた森島泰雄さんは、八八年までの六年間、愛知県赤十字血液センターの研究課長を務めた経験があるため、血液センターの内情には詳しくかった。骨髄移植のためには、ドナーと患者のHLAが一致していなければならぬから、その検査が不可欠なのだ。結果的には血液センターの職務とは無関係に、職員がボランティアの形で協力してくれることになった。その代わり、ドナー登録者からの採血には骨髄移植グループの医師が交代で当たった。

患者登録の公表を決めたのは、五月八日の第八回運営委員会である。それは、下旬の日本輸血学会で経過報告をする必要があったことや、バンクとしての態勢がある程度整ってきて、患者登録の事実も全国の関係者のあいだで広がってきたことなどからだった。実は、それまでの名称は「名古屋骨髄バンク」が通用していた。だが、三重の募る会の旗揚げが下旬に予定されていたこともあって、マスコミ発表に際しては「東海骨髄バンク」を名乗ることが正式に決まったのである。

この第八回運営委員会では、骨髄バンクの基本原則が取り決められた。実際にバンクが発足してから、細かい部分での変更はあるが、法律家を組織に取り込んだ成果がここにもあらわれている。ドナー募集に関しては、すでに述べたように名古屋骨髄献血希望者を募る会に業務委任することが決まったが、募る会の原則は次のとおりだ。

- ① 本会は、非血縁者間骨髄移植の骨髄提供希望者を募ることを目的とする。
- ② 各地区ごとにまとまった唯一の組織でなければならない。同じ目的の組織が同一地区にふたつ以上存在することは極力避けるようにする。
- ③ 各地域の募る会は、各地域のまとまった骨髄移植チームの組織とともに、骨髄バンク組織をつくりあげるように努める。特定の医療チームとだけ提携することは避ける。

④ 登録希望者のHLAタイピング結果、およびHLAタイピング済みドナーリストは、募会では保管せず、骨髄バンク組織で保管する。特定の移植センター、病院などでは保管しない。

⑤ 登録方法、登録基準を全国的に統一する。

a 骨髄提供、登録につき個人的に十分理解、納得した人だけを登録する。具体的にはパンフレットを読んだうえで、同意書に署名をした人、もしくはそれに準じた人を登録者とみなす。

b HLAが一致すれば、骨髄移植の適応とみなすすべての人に骨髄提供をする意志のある人だけを登録し、ある特定の人だけに提供するという人は、登録したりHLA検査は実施しない。

c 登録者の年齢は、十六歳～六十歳、健康な人と仮に定める。また、高校生もしくは十八歳未満の人は、登録、HLA検査までは実施するが、患者との照合、提供は高校卒業後、または十九歳以上とする。また未成年者は、骨髄提供に関しては保護者の同意を必要とする。

⑥ 各地区の募会、または骨髄バンクで募集した登録者は、近い将来全国的な第三者による骨髄バンクが出来たときには登録することとし、登録する際にはあらかじめこのことで希望者に同意を得ておく必要がある。

⑦ 希望者、登録者のプライバシーは、厳重に守られなければならない、情報は一切個人の許可なくして他人、他所へ提供してはならない。このために細心の注意を払う。

⑧ 骨髄提供に際しては、提供者の保護に努める。骨髄提供者、またはHLA一致骨髄提供者、骨髄移植の予定などに関する個人的な情報は、公開しない。

⑨ 骨髄移植希望患者の登録は、本会では実施しない。

登録者年齢はその後、「五十四歳まで」に変更された。また、未成年者は登録だけは受け付けるが、提供は二十歳を超えてからに決まった。

一方、バンクの原則は次のとおりだ。

① 本バンクは、各地区ごとにまとまった唯一の組織でなければならない。

② 各地区のバンクは当面統一された原則のもとに活動し、近い将来全国的なバンクを組織することを前提とする。

③ 本バンクの構成員は、バンクに関する個人的な情報を一切公開してはならない。

④ 患者登録は患者の主治医より骨髄バンクへなされる。

⑤ 患者登録は別途定める移植適応条件に合う患者とする。

⑥ ドナーの管理（HLA型など）およびHLAの照合は、第三者的機構によってなされる。

⑦ コーディネーターがドナー候補と主治医・患者とのあいだに入り、非血縁者間移植の調整

をする。コーディネーターは患者の治療グループの医師以外の第三者的な医療関係者とする。
⑧ ドナー候補の個人的な情報は患者に知らせない。また、患者の個人的な情報はドナーに知らせない。

⑨ ドナーの安全確保、また移植を円滑・安全に進めるためにも当面の間、実施施設は骨髓移植チームとして年間十例以上（当面は五例以上）の骨髓移植実績があり、かつ各施設の倫理委員会またはこれに準ずる組織による非血縁者からの骨髓採取に関する承認がある施設であること。

このうち、⑤にある「別途定める移植適応条件」は「登録のためのガイドライン」だが、それによれば、登録できる患者は四十歳（症例によっては四十五歳）以下の、移植まで半年くらいの余裕のある症例で、疾患は慢性骨髄性白血病、急性骨髄性白血病、急性リンパ性白血病（小児のリンパ性白血病第一寛解期と予後良好症例は除く）、重症再生不良性貧血、重症複合免疫不全症となっている。

六月には二回の運営委員会が開かれ、ここで詳細な運営方針が決まった。

こうして運営委員会は十一回開催されたが、それを経て九月十八日の発起人会にこぎつけたのである。

この発起人会で、理事や評議員が内定したが、理事長には名古屋大学医学部名誉教授の日比野進さん（八四）に白羽の矢が立っていた。日比野さんは血液学会の大御所で、ある意味では民間の骨髓バンクに「箔」をつけたともいえる。
「組織化について、関係者以外の人たちは、本当にバンクができるのだろうか、かなりクールに見ていたと思います。中には、足を引っ張るところまではいかなくても『とてもできるものじゃない』と言う人もいましたね。その点では、ずいぶん時間をとられました」

東海骨髓バンク誕生

「募る会」などの努力実る

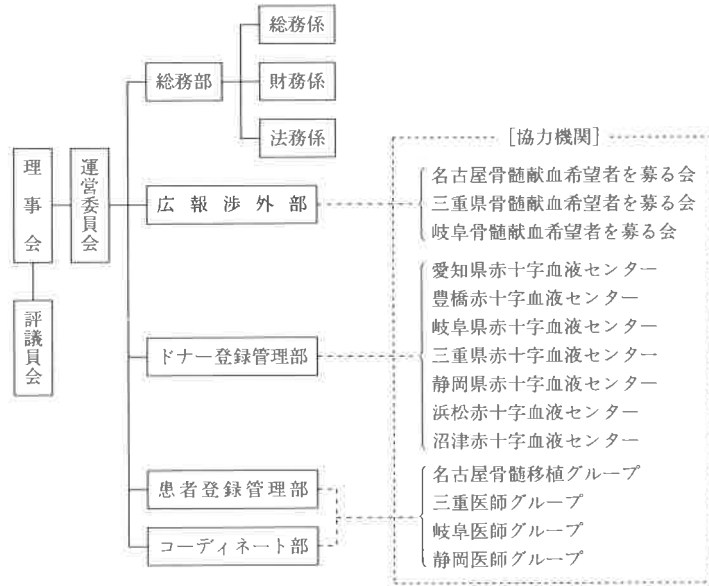
全国で初

白血病患者の多くは骨髄移植の道を開き、全国で初めての「東海骨髓バンク」理事長日比野進（名古屋大学名誉教授）の発起をきっかけに、二十日、名古屋市中村区、名古屋国際センターで開かれた。骨髄バンクは、骨髄の骨髄「名古屋骨髄造血移植会」名古屋、日比野のバンクが提供希望（ドナー）と患者（受入）や医師グループが社名「募る会」を組織し、移植の促進（造血）を目的として、急いで設立された。あきさつに立ち上げた日比野理事長は「骨髄移植の先進地、押さえる患者募集の要」の意を込めて、

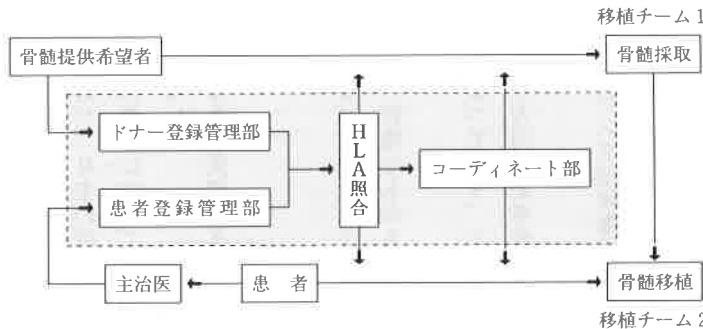
東海骨髓バンクの設立を報じる
中日新聞記事（'89年10月22日付）

役員の人選に駆け回った森島さんが、そう振り返る。しかし、疑問視する見方は「バンク発足」にまっしぐらに突き進んでいた。
バンク設立の十月二十一日は、名古屋国際センターホールで、シンポジウムに先立って第二回発起人会と設立総会が、シンポジウムと同じ会場で開かれた。論

〔図1〕 東海骨髄バンクの組織



〔図2〕 骨髄バンクの役割 (点線内が骨髄バンク)



議は沸騰した。その模様を、NHKの加藤行輝さんは丹念に取材している。「開けた先生が多かったものだから、活発な意見が出たんです。正直いって、骨髄バンクはまともじゃないと思いましたよ。」ところが、意見がほぼ出尽くしたところ、ある先生が『それではこのへんで、決を採りたいと思います』って賛否をとつたら、なんと全員が賛成なんです。カメラをずっと回していたんですが、そのときの大谷さんの顔は一生忘れられないでしょうね」

加藤さんが、まとまりそうもないと感じた同じ思いが、大谷さんにもあったのだろう。議論がつづいているあいだ、大谷さんの顔は真っ青だったという。バンク設立にゴーサインが出た直後、だれかれかまわずに大谷さんは指のVサインを振りまいた。

〔図1〕にみられるとおり、その機構は非常にシンプルだが、構成メンバーは豪華絢爛といっている。

理事長には、国立名古屋病院名誉院長の日比野進さん(名古屋大学名誉教授)、専務理事に名古屋大学第一内科教授の齋藤英彦さんが就任し、理事には以下の十六人(五十音順・敬称略)が就いた。太田元次(愛知県医師会会長)、大谷貴子(募る会代表)、神谷忠(愛知県赤十字血液センター副所長)、北村千之進(愛知県血液疾患研究財団)、木村禧代二(日本輸血学会東海支部長・国立名古屋病院名誉院長)、木村邦夫(三重県赤十字血液センター所長)、串田正克(弁護士)、小久保幸雄(愛知県赤十字血液センター所長)、小寺良尚(名古屋第一赤十字病院内科部長)、小山齊(名古屋弁護士会会長・日本弁護士連合会副会長)、白川茂(三重大学第二内科教授)、広瀬光男(岐阜県赤十字

血液センター所長)、堀部敬三(名古屋大学小児科)、三品雅義(税理士)、森島泰雄(名古屋大学第一内科)、山田一正(名古屋大学分院内科教授)。

ところで設立までに解決できなかった課題がある。ドナーに対する補償態勢だ。日本の保険会社がどこも引き受けてくれないのである。検討すらしてくれなかった。ドナーの傷害について、医師に過失があれば医師賠償責任保険の適用となるが、無過失だとうにも仕方ない。

「万が一のことがあれば、理事が一人百万円ずつ出して、運営委員にもそれなりに負担してもらえば、なんとかなるかもしれない」

そんな私案も出たが、ともかく補償態勢がないままのスタートだったのだ。

ある保険会社が開発した「ドナー生命共済システム」に加入できるようになったのは、ようやく九一年八月十五日からだった。それまでの十八人のドナーからの骨髓採取に、軽微なものも含めて事故がゼロだったのは、幸運に恵まれたとしかいいようがない。

この共済システムは、最高三千万円の補償だが、掛金は性別・年齢別に異なっており、二十歳の女性で十四万円弱、五十歳の男性で約五十万円といった具合だ。掛金のうち十万円が患者負担となり、十四人が加入した。掛金の差額は、東海骨髓バンクの負担だった。

九二年四月三十日からは、別の保険会社が開発した死亡時五千万円の「骨髓バンク団体傷害保険」に加入した。こちらの掛金は一律九万八千六十円で、二十三人が加入した。通院給付金(一日あたり三千元)がふたりのドナーに適用された。

普及と理解のためのシンポジウム

スタートしたばかりの東海骨髓バンクは、全米骨髓バンク理事長のロバート・グレイヴィス博士と、ワシントン州立大学医学部教授のジョン・ハンセン氏を招いた。両氏は、十一月六日に名古屋で開かれた骨髓バンク公開シンポジウム(日本輸血学会、日本骨髓移植研究会主催)で講演した。東京と大阪でも同様の講演をし、アメリカにおける骨髓バンク運動が、日本で初めて報告された。

世界で初めて骨髓バンクができたのはイギリスだが、アメリカで真っ先に声を挙げたのがグレイヴィス博士だった。娘のローラさんが白血病と診断され、世界初の非血縁者間骨髓移植を受けた。ローラさんのHLAと一致するドナーを見つけたのが、ハンセン教授だ。グレイヴィス博士は、娘が移植を受けたシアトルのフレッド・ハッチンソン癌研究センターに「ローラ・グレイヴィス骨髓移植財団」を発足させた。七九年のことである。

アメリカではその後、各地に骨髓バンクが出来上がったが、ドナー登録者が数百人から数千人数位と少なかったうえ、連携がとれていなかったことから、患者との適合率はきわめて少なかった。そのためグレイヴィスさんらが「全国統一」を提唱し、八七年に全米骨髓バンク(NBMDR)の設立にこぎつけた。NBMDRはその後、現在につづくNMDP(National Marrow Donor Program)に名称を替えるが、来日したころのドナー数は、六万五千人ほどだった。

両氏の講演は詳細をきわめ、写真や図表をふんだんに使った説明に、参加者は大規模な全国バ

ンクの必要性を痛感した。にもかかわらず、全国的な組織化は、とりわけ行政側にそうした雰囲気
がほとんどなく、改めて東海骨髄バンクの実績づくりの大切さを感じた関係者も多かった。

この公開シンポジウムでは、興味深い質問が会場から寄せられた。最終同意書に署名しないケー
スが考えられるのだが……と、アメリカでの「ドナー応諾率」を尋ねた医師がいたのだ。全米骨髄
バンクでの移植は、この時点で二百例を超えていたが、ハンセン教授はこう答えた。

「初めの三十例までの経験で、最終的にOKがもらえなかったケースが二件ありました。それは、
ドナーの家族が難色を示し、ドナーに圧力をかけたため、私たちのほうからドナーにならないよう
申し上げたのです。私たちは、ドナーは間違ひなく決心してくれたものと思っておりますが、家族の
協力が無いという困難に直面したのです。そのため、ドナーに説明する場には配偶者か家族の一員
を必ず連れてきてもらうよう方式を替えました。アメリカ社会でも家族の支持と協力を得ることは
重要なのです」

個人主義が日本よりはるかに強いアメリカでもそうなのだ。東海骨髄バンクのコーディネーター
も、同じ状況に何回か直面することになる。

九〇年八月には、小寺良尚さんと大谷貴子さんが「世界骨髄バンク会議」に出席し、併せて全米
骨髄バンク（NMDP）を視察してきた。

世界骨髄バンク会議では十一カ国の代表が、それぞれの国の現状を報告したが、主要国のドナー
登録数は、アメリカカ十九万人、フランス五万六百人、ベルギー八千人、カナダ一万二千六百人、オ
ランダ四千人などだった。NMDPは、前年秋の公開シンポジウムの折に、グレイヴィス博士から
「六万五千人」と報告されたが、一年たらずのうちにはほぼ三倍に急増させたのだ。

会議のあと、大谷さんらはシアトルを訪れた。

「初めに移植病院を訪問したんですが、移植患者にかかわる看護婦さんは私服でした。少しでも患
者さんの緊張感をやわらげる効果があるという説明でしたね。それに、食事も一般の患者さんと同
じものをとっていたのが印象的です。そのあとで患者登録部門を見学しましたが、いずれの部門で
も感じたのは、仕事が完全に分離され、国や一般の人々の理解がものすごく得られているのが特徴
でした。例えば広報にしても、外部の人たちがPRをしたいと申し入れてくるそうで、広報費が一
切かからないと聞いてうらやましくなりました」

また、十月初めには、米国フレッド・ハッチンソン癌研究センター腫瘍部長のエドワード・ドナ
ル・トーマス博士（七三）が、九〇年度のノーベル医学・生理学賞に輝いたニュースが世界中に伝
えられ、骨髄移植関係者を喜ばせた。

トーマス博士は近代的骨髄移植術を確立した人である。五六年に犬による骨髄移植実験を開始し、
七〇年代になって移植を成功に導く条件をまとめたのだ。つまり、放射線の全身照射によって患者
の骨髄細胞を死滅させ、HLAの一致したドナーから移植する方法が、トーマス博士によって臨床
に応用されたのである。十一月に香港で開かれたシンポジウムで、大谷さんは初めて対面したが、

トーマス博士はその後、数回来日することになる。

第五回名古屋シンポジウムが開かれたのは九〇年十月十三日だった。東海骨髓バンク設立一周年記念と銘打って、ユタ州立大学医学部教授のパトリック・ベティ博士とミネソタ大学内科教授のフイリッツ・マクグレイブ博士が、全米骨髓バンクの現状などを講演した。このシンポジウムの後援団体に愛知、三重、岐阜、静岡の東海四県と名古屋市の名を連ねたことは、バンク運動が行政にも認知されたものとして、高く評価される。

ベティ博士は、全米骨髓バンク発足当初のシアトルでのドナー募集状況を説明した。最初は血液センターの成分献血登録者六百四十八人に手紙を出して、骨髓提供の意志を確認したら、六割以上が興味を示し、結局三百三十人（五一パーセント）が登録してくれたという。次に、HLAのデータがわかっている患者家族三千三百九十三人に打診したところ、登録者は三百四十七人（一〇パーセント）にとどまった。さらに、一般献血者二万一千三百七十五人では千七百十人（八パーセント）だったという。

「最近、私たちが注目しているのは一般献血者ですが、骨髓バンクに少しでも関心をもっていただいた方には、ご本人の同意を得て余分に採血しておき、骨髓提供に関するパンフレットを渡します。あとで登録はがきで登録の意志が確認されたら、凍結保存しておいた血液でHLA検査をします。こうすることで、効率的に提供者を集めることができるのです」

ベティ博士の説明だが、日本でも採り入れる気になれば可能な方式である。マクグレイブ博士は、慢性骨髄性白血病患者への、血縁者間移植と非血縁者間移植の比較データを明らかにした。

それによると、非血縁者間移植では患者百八十五人（慢性期百三人、移行期八十二人）のうち、九十八人がHLA一致、八十七人が一部不一致だったが、百二十四人に急性GVHDが発症し、うち六三パーセントはII度からIV度の重症だったという。慢性GVHDは四三パーセント、再発は一九パーセントに起きた。

「シアトルでおこなわれた五十二人の非血縁者間移植と、百四人の血縁者間移植を、病期や年齢などに偏りのないよう比較した結果、急性GVHDの発症が非血縁者間に重篤だった半面、再発は血縁者間のほうが多く発生しています。したがって、非血縁者間移植の優位点は再発が少ないことだといえますが、全体的にみて両者間にはほとんど差がないとみていいのではないのでしょうか」

東海骨髓バンクとしてのシンポジウムは、このあと九二年五月三十日の第六回が最後だが、三回にわたってNMDPの関係者と呼んだ。先進バンクから最新情報を吸収しようという姿勢がありありと見えた。

九一年一月二十五日に、第十三回日本骨髓移植研究会が名古屋で開催された。サテライトシンポジウムでは「日本における骨髓ドナーバンクならびに非血縁者間骨髓移植の現状と将来」と題して十人が発表した。中でも注目されたのが、東海骨髓バンクのコーディネーション状況だが、その内

容は第三章に譲ろう。

会場の一角では「ドナー募集に関する意見交換会」が開かれ、全国からおよそ九十人の関係者が集まった。経験を基にドナー募集のあり方を語り合ったのだ。この問題は、今後も十分に通用するので、代表的なものを取り上げてみよう。

「福岡では、献血に年間二十万人が協力しているが、あるとき献血者全員ではないものの骨髓バンクに関する資料を渡したところ、登録してくれたのは二百五十人にひとりにとどまり、アメリカの八パーセントには及ばなかった。このことから、ターゲットは献血者でいいとしても、それだけでは不足のような気がする。ボランティアの名前で募集しているため信用性がないからだと思う」

アメリカで八パーセント、という発言が出ているのは、第五回名古屋シンポジウム(九〇年十月)で、講師となったユタ州立大学医学部教授のパトリック・ベティ博士が報告した数字を指している。「最近まで血液センターにいたが、日赤の現在の最大関心事は血友病患者のための血漿分画製剤集めだと思う。そこに骨髓バンクを入れろといっても、できないということになる。私が思うに、余力のある血液センターが募集もおこなえばいい」

日本骨髓バンクが設立されてから、ドナー募集に関してはきわめて非協力的だった日赤が、一年半後の九三年五月、この発言どおりに「可能なセンターが協力することはやぶさかでない」と明言したことを考えると、この発言は先見性に富んでいる。

「私たちはバンク活動するに当たって、成分献血登録への協力ということでやってきた。両者はどうしても切り離せない関係にあるからだ。二百人近いバンク登録者のうち、ほとんど全員が成分献血登録者となっている。バンク登録者にも血小板献血に協力してもらっているので、骨髓バンクの推進が成分献血の増加にいい影響を与えていると思う」

「北海道では血液センターと保健所の協力が得られ、百五十人から登録の意思表示があった。HLAはDR座まで一挙に検査する方法をとっている。北海道は広いため検査機関まで足を運んでもらうのは大変なので、イギリスのアンソニー・ノーラン方式を検討中」

アンソニー・ノーラン方式というのは、最寄りの医療機関で採血してもらった検査用血液を、骨髓バンクへ郵送する方式だが、日本国内では結局この方式は採用とならなかった。

「弁護士立場からいうと、どのような情報で同意したかというインフォームド・コンセントと、最終同意つまり本人の意志確認が一番重要視されなければならない。同意は法的には個人の了解さえあればいいのだが、実際には家族の同意も重要だと思う」

「ドナー募集とインフォームド・コンセントは一種の自己矛盾になるようだ。初めからインフォームド・コンセントを強くやると、登録者は少なくなるのではないか。両者は分けて考えてもいいような感じもする」

「アンソニー・ノーランでは十七万人を集めたが、インフォームド・コンセントが十分でなかったばかりに、実際に提供してくれる人は少ないようだ。やはり何らかの情報提供は必要になる」

ドナー募集では頼りになるマスコミからも意見が出た。

「これからは、助かった人も助けた人も出てもらってアピールすることが、ドナーを増やすことに必要になると思う。プライバシーの問題もあろうが、個人が特定できない形で前面に出てくれることを希望したい」

「やはり、だれかをイメージできるときに、マスコミによる反応は大きいようだ。しかし、マスコミを利用して患者家族が募集しても、最後の段階で同意が得られなかったケースもあると聞いているので、特定患者だけでなく広い意味でのキャンペーンができないかと考えている」

移植第一号の成功

東海骨髓バンクがスタートしてから、五カ月近くたった九〇年三月九日、骨髓移植第一号の実施とその成功を伝える記者会見が開かれた。このあとの五十四例は個々のケースをマスコミ発表することはなかった。第一号では患者名を含め、移植病院など一切明らかにされなかったが、本書ではご本人とバンクの了承を得て、患者名を明らかにしたい。

第一号の患者は、骨髓バンク運動関係者にとっては「おなじみ」の人だ。大阪市福島区の会社員橋本和浩さん(三二)である。

橋本さんは大阪府堺市出身だが、京都大学を卒業して大手の生命保険会社に入り、東京勤務をづけていた。フレッシュマン二年目の八八年六月、会社の健康診断で白血球数の多さを指摘された。会社ではこの年から血液検査を項目に加えていたのだ。再検査に訪れた都内の病院では、いきなり



社会復帰して、通常の仕事をこなしている橋本和浩さん(左)。右は、ドナーを待つ大阪府在住患者の渡辺浩司さん(28)と平田浩三さん(37)。3人とも骨髓バンクのボランティアだ=’93年3月、大阪・中之島公園で

骨髓穿刺を受けた。骨を貫いて、内部の骨髓液を採取しての検査である。

「春の連休で北アルプスを縦走したとき、ピッケルで肋骨を痛めたので、そのせいだろうと思っていました。ところが骨髓穿刺ですから、これはまずいのかなと思って、本に目をおしてみても、あまりいい状態ではないとわかりました」

会社の検診では三万だった白血球数が、再検査では十万に増えていた。通常値は数千だから、東京で研修医をしていた大学時代の友人は、白血病の可能性を指摘した。そうだとすれば大変だからと、実家に近い大阪市内の病院を訪れた。病名は橋本さんのほうから、主治医に尋ねた。一拍おいて、主治医はゆっくりうなずいたという。慢性骨髓性白血病だったのだ。

「自覚症状がないので、白血病とわかってても死ぬといった実感がありません。むしろ、こういう病気で会社に役立たずの人間として扱われるんじゃないか、というのが不安でした」

大阪の病院では、化学療法をつづける方針をとった。三週間に一回、飛行機で東京と大阪を往復する通院生活の始まりである。通院を除けば、ごく普通の会社員としての仕事をこなしていた。

慢性骨髄性白血病の場合、いつまでも薬を期待してはいられない。やがて急性転化を起こして、急性白血病と同様の症状を呈してしまえば、薬の効果は全く期待できないのだ。急性転化してからの移植は成功率が極端に低くなる。

移植することを前提に、弟を含めて家族や親戚のHLAを検査したが、だれとも一致しなかった。父の昭治さん（五九）だけが、わずかに一部不一致だった。

そのため八九年一月には、母校の京都大学で「橋本君を救う会」が結成された。長谷川利治工学部教授を会長に、西島安則学長、河合隼雄学生部長ら呼びかけ人にして、橋本さんのドナーを見つけようというわけだ。「救う会」は、地元の大阪にもできた。京大のほか大阪府立三国丘高校の同窓生らにも呼びかけ、最終的には三千二百人もの人々がHLA検査に応じてくれたが、残念ながら一致者はいなかった。

そうこうするうちに、八九年六月に血小板の数値が急激に落ちた。急性転化の前触れらしいとわかって、移植が急がれる事態となった。HLAが一部不一致の父をドナーにしての移植を実施することにした。ただ、大阪の病院では完全一致の移植しかない方針をとっていたため、名古屋市内

の病院へ転院したのである。

「初めのうちは、移植に備えて徹底的に検査をするために、まず入院という段取りだったんですが、血小板が落ちて緊急入院になりました。頭の中で内出血を起せば死に直結しますから、このとき初めて死の恐怖を実感しました。それと、採血したあとの血がなかなか止まらなかったのも怖かったですね」

転院前、骨髄バンク委員会に患者登録をしていたが、まさか適合ドナーがあらわれるとは考えてもいなかった。思いがけず、ドナーの存在が伝えられたのは七月だった。しかもHLAが完全に一致しているという。

「父とは一部でも不一致ですからリスクがあるわけです。ぴったり合った人がいるというのは、本当にうれしかったですよ」

ドナーを父親にするか、募る会に登録した見知らぬ善意者にするか、決断は主治医に任せられた。主治医が選んだのは、HLAが完全一致している非血縁ドナーだった。

移植がおこなわれたのは、八九年九月十三日である。東海骨髄バンクの設立は十月二十一日だから、「発足の一カ月以上前の移植を、バンク第一号といえるのか」という「意地悪」な見方をする人も出てきかねないので、背景説明を加えておこう。

橋本さんが入院したときは、父からの移植が前提だったから、無菌室を確保する関係で移植日は決まっていたし、骨髄バンク委員会が受け付けた登録患者である。一方、バンク設立も準備会を重

ねた結果、会場を押さえるために初夏には期日が確定した。橋本さんのドナーは、募る会に登録した人であり、コーディネーターを務めたのは名古屋骨髓移植グループの医師であるから、東海骨髓バンクの移植第一号といって、いっこうに差し支えない。

患者が成人の非血縁者間移植は、橋本さんが日本では初めてだった。

さて、マスコミ発表がおこなわれたのは、国立名古屋病院であった。発表に当たって、ドナーも患者も、住所、氏名はむろんのこと、特定できるデータは何も触れられなかった。せいぜい「二十代の男性」「四十代の男性」程度である。

ドナーと患者の手記も公表されたが、読み上げる大谷さんの声はつまりがちで、眼鏡の奥の両目からは大粒の涙があふれ落ちた。二人の手記はほぼ同じ分量だが、けっこう長い。四百字詰め原稿用紙で三枚ほどもある。そのときは「匿名」である橋本さんは、概略次のように書いた。

——私の場合、二、三千人に一人の割合でHLAの一致する人がいるとのこと。通勤の満員電車に乗っているときも、この電車の中に二人くらいはいるだろうか、HLAの一致する人が一人はいるだろうか、とつい考えていました。しかし、もし一致する人がいても、他人のために入院してまで提供してくれる人がいるかどうか、と考えると、やはりどうすることもできないんだと思うしかありませんでした。

東海骨髓バンクに登録されている方の中にHLAの一致する方がいて、提供者となっていただけと聞きました。本当は叫びたいくらいうれしかったのですが、ことわられるのではないかと、不安で仕方ありませんでした。移植の当日も、提供者の方が風邪をひいたりしないだろうか、運ばれてくる骨髓液が交通事故に遭わないだろうか、などと、実際に腕から骨髓液を入れてもらうまでは、提供者の方には失礼なのですが、不安でした。

ドナーとなった男性は、概略こう書いた。

——私が病気で輸血が必要なら、なんとしても輸血をしてほしい。今は健康でもいつそうなるかわかりません。今それを必要としている人がいるなら、私ができるのは献血やアイバンク、腎バンクへの登録であると考え、そのようにしています。

提供するに当たっては、全身麻酔で手術をすることで、眠っている間に処置される不安、若い看護婦さんにすべてを見せなくてはならない恥ずかしさがありました。でも、生死のはざまにいて私を待っていてくれる人がいる。明日は我が身という考えが、途中でやめようという気を起こさせなかったにすぎません。

しかし、移植したからすべてよくなるものではなく、きわめて難しい処置と聞いていたため、気になる日々がつづいたある日、患者さんの状況を知らせていただき、提供してよかったと実感したところです。マスコミで骨髓移植が伝えられると、周囲の人々はそれを話題にすることが多く、そうした中からバンクへの登録はがきを出してくれた人が複数いたときは、本当にうれしくなりました。

移植成功のニュースを、中日新聞と読売新聞（中部本社版）は、十日付朝刊で一面トップ記事に

扱った。

「限られた、いわば顔のない情報で、よく記者さんたちが納得してくれたものだと思います。もっとも、単なる取材対象としてでなく、骨髓バンクに理解を示してくれる記者が多かったからでしょうね」

そう語るのは、発表に同席した弁護士の串田正克さんだ。

理解を示す範囲を超えて、身内に白血病患者を抱えた経験を持つ記者もいた。NHKの加藤輝輝さんである。だから記者会見の前、マスコミ発表をどういう形でやればいいか、加藤さんに相談が持ちかけられた。

「ドナーも患者も顔が撮れないというんですから、インパクトが弱いわけです。それなら、ふたりに手紙を書いてもらえばいいと思いましたね。現物だと筆跡がわかってまずいだろうから、書き直したものを用意したらどうかと提案したんです。ところが、うちは活字じゃありませんから工夫が必要なんです。ノウハウを伝えただから、今度はその手紙を事前にほしいと申し入れました。あらかじめナレーターに朗読してもらったものを、会見の場を中継しながら、映像に音をかぶせることにしたんです」

放送媒体ならではの苦労話ともいえるが、このころになると加藤さんは、ニュースで伝える場合も「日本で初めての骨髓バンク」という枕言葉を必ず使った。

橋本さんは、マスコミ発表から一カ月たった九〇年四月十六日に退院した。肺炎やGVHD（移

植片対宿主病）などの合併症はひととおり経験したくらいだから、退院後も病院近くのマンションで療養生活を送った。ナマ物を食べることは禁じられたため、十二月の職場復帰までのおよそ八カ月は、母の雅子さん（五七）が、食事の面倒などをみた。

復帰した会社の勤務地は、実家に近い大阪になった。いくつかのマスコミにも取り上げられたが、どこも「第一号」については触れていない。今も免疫抑制剤を飲んでいるが、それらの後遺症か右目が白内障となり、九三年四月に手術を受けた。

それでも、日本骨髓バンクへのドナー登録者を増やしたいという思いから、大阪骨髓献血の和を広げる会の旗揚げに参画し、九二年十月に発足した関西骨髓バンク推進協会では、運営委員のひとりとして活動をつづけている。

骨髓移植からまる四年たった九三年九月、橋本さんは次のように心境を語った。

「移植のすぐあとは、移植後の日数を『日』単位で数えていましたが、それが『月』単位となり、今では半年単位になっているような気がします。日常生活は仕事を含めて忙しい日々ですが、それなりにエンジョイしているつもりです。健康面では、いくつかの症状を抱えています。最大の不安はなんといっても『再発』ですね。移植後四年半で再発した方もいると聞いていますし、白血病を含む癌患者にとって『五年』がひとつの目安になっていますから、とにかくあと一年を乗りきりたいというのが、もっかの最大の願いです」

日本赤十字社の血液センターや献血ルームで、東海骨髄バンクのパンフレットを目にして登録した人が意外と多い。しかも、かなりのドナーが成分献血をつづけている。血液センターの協力が、いかにドナーを増やす力となっているかの証明とも思えるが、骨髄ドナーとなったのを機に、献血を始めた人々もいる。

*

名古屋市長東区の国家公務員竹下孝嗣さん(二九)は、第一章で取り上げた名古屋大学病院での非血縁者間移植第一号のときに、提供を名乗り出たひとりである。HLAが一致せず、そのときは提供に至らなかったが、東海骨髄バンクのドナーでは唯一の例だ。

「予備校生のときでした。記憶はかなり薄らいているんですが、骨髄移植とはどういうものかほとんど知らなくても、患者さんが幼い子どもだったし、大変だといわれればすぐ反応したんですね。東海骨髄バンクに登録するよりは、もっと簡単な気持ちだったような気がします。実際の提供は、あの経験があったからでしょうね」

竹下さんのHLAは、このときは適合しなかったが、病院からの礼状はしっかり届いた。兄の洋基さん(三二)が医師で、骨髄移植の話はちよくちよく聞かされていた。

「その兄がずっと献血をやっています、たまに付き合っていたんです。そのうち、お前もドナー登録したらどうだと兄に勧められて、バンクが発足する直前の登録でした」

減多に当たるもんじゃねえ、という兄の言葉を裏づけるように、二次検査の連絡がきたのは二年以上たったころだ。

「正直いって困ってしまっただけです。くるわけないと思っていたのがきちゃった。当たった以上やるのは嫌だし、動機からいえばやるのが当然なんです、いざとなると二の足を踏むようなところがありました。パンフレットに『かなり痛みが残ります』なんて書いてあれば、やっぱり痛いのかなあと。でも、それくらいのことです。人ひとりが助かるならということ、踏み切ったわけです。結果的には提供してよかったと思います。提供そのものは淡々とした気持ちでした」

入院期間中に職場の行事があったため、提供することを明かしたが「ようやるなあ」という反応が圧倒的だったという。

「どこの骨を切って出すのかとか、骨髄移植の実態を知らない人が多いですね。麻酔が覚めてからは『やっと終わったか』というのが正直なところでした。二次検査からまずいぶん時間がかかりましたから。患者さんについては、元気になってくれればいいという程度で、意外とあっさりしているんです。というのも、患者さんの情報が一切ないためなんです。仕方ないとは思いますが……」

困ったことといえば、尿道カテーテルくらいだった。

「取ってから、尿感はあるんですが出てこないんです。尿感が二時間おきぐらいにやってくるので、それが苦痛でしたね。でも、いつの間にかそんなことは忘れてしまって、もう一回提供しろと言われたら、きつとやるでしょう」

*

愛知県稲沢市の地方公務員松岡一己さん（四〇）は、二十代のころ免許証を書き換えるときに献血を始め、一カ月に一回の成分献血が百二十回を超えた。血液センターを訪れているうちに、置いてあった東海骨髄バンクのパンフレットを目にして登録した。

「成分献血ではHLAのA・B座を教えてください、日本人に多い型だと言われてはいたんですが、二次検査の依頼が四カ月後ですから、それにしても早いなと思いましたね」

奥さんは登録しなかったが、松岡さんが提供することについては反対しなかった。

「麻酔は一瞬にしかかり、一瞬にして覚めた感じだったんですが、病室で最初に考えたのは、相手の患者さんはどういう人だろうということでした」

そのときは患者情報を持っていなかったが、提供後に患者の奥さんからバンクを通じて手紙が送られてきた。四十代前半で奥さんがいるといった、松岡さんとそう変わらない境遇らしい。

「奥さんからの手紙に『神仏のご加護があった』と書いてあって、喜びがものすごく伝わってくるんです。私自身が健康ですから、普通に生活できるほど幸せなことではないと知っていますし、よかったですと思いましたね」

採取後の痛みもとつくとれた一年後、再び手紙が寄せられた。

「亡くなった、と書いてありました。ご家族は最後まで健康を取り戻すと信じていたようですが、現実には厳しいですね。人助けをしたと私も思っていただけに、提供したことによって又か喜びをさせてしまったのかと、考え込みました。移植をしていなければ、もっと長生きしていたかもしれない、という気持ちもありましたし」

適合者がいればまた提供してもいいとは思っているのだが、このときの経験があるため、同じようなシヨックは受けたくないという気持ちもある。

「ただ、ドナーの立場だけからいえば、全身麻酔をかけるから大変な手術だと思っていたんですが、思っていたほどのことではなく、普通に協力できるなというのが、一番の印象です。他人に勧めるというのは意外と難しいんですよ。成分献血をしたことについても、冗談っぽくからかったり、中には『暇つぶしか』なんていう人間もいますからね」

*

愛知県大山市の会社員長谷川隆義さん（三六）は、名古屋の日赤血液センターで成分献血をつづけていた。センターの看護婦と、腎バンク・アイバンクにも入っている話をしながら、新聞でちらっと読んだ骨髄移植を「脊髄移植」と読み違いしてしまったところ、骨髄バンクについて詳しい看護婦だったので、移植の手順やバンク登録の方法も教えてくれた。

「HLAデータはわかっていましたから、二次検査の依頼は、ある日突然といった感じで届きました

た。そのとき、神様に選ばれた感じで『もしかして、最後までいくんじゃないか』という予感がしたんです」

予感的中し、三次検査は二カ月後だった。そのころ独身の長谷川さんは、二次検査直前に見合いをし、検査後に結納、三次検査とつづき、提供は結婚してからとなった。

「腎バンクとアイバンクに入っているのは見合いの席で言いまして、ある程度理解を得られていたので、骨髄のほうも楽観していたんです」

妻となった由美さん（二七）はそうでもなかったのだが、由美さんの両親が難色を示した。嫁に出したはいいが、万が一のことがあればたちまち寡婦に……と、口には出さずとも、明らかにそうした気持ちが見てとれた。

「まさに、岸辺に立っていたら溺れている人が目の前にいるのに、という状況ですよ。やめられるものならやめてほしいとも言われましたが、コーディネーターの先生に電話での説明をお願いして、ともかく納得してもらいました」

そのころ長谷川さんは、会社のある名古屋まで自動二輪車で通勤していたが、電車に切り替えた。交通事故を目の当たりにして、自分もそうやってしまつては患者に申し訳ないと思ったからだ。

入院は二泊三日だった。日数が最も少ないドナーのひとりである。

「ぼくらの入院経費は、患者さんの負担になると聞いたものですから、ただでさえ医療費がかさんでいるはずなので、一日でも早く退院したほうがいいと思っただけです」

やはりちょっと無理だったようで、病院から名古屋駅までの途中で立ちくらんでしまった。自宅までの電車の椅子にも、うまく腰掛けられなかったという。

提供を終えたあと、骨髄バンク運動を熱心につづけてきた人々の家族が、次々と亡くなっていった。それらのニュースを知るうちに、たまたまなくなってきた。

「ぼくとしては、提供したことによって一仕事終わったような気分になっていたんです。でも、バンク設立の発想をもって運動した人々が、肝心の家族を助けられずに涙を飲んだことを知って、何かをやらなければいられなくなりました。かといって大谷さんのようには動けないし、自分なりにできることをしようと思いいちました」

長谷川さんは、大谷さんが書いた本と、骨髄移植を紹介したビデオテープをダビングして、名古屋市内の五カ所の献血ルームに寄贈した。

「成分献血に行ったとき、ぼくが贈ったビデオテープを返却にきた人がいて、貸し出しをして役立つているんだと、少しは安堵感を得ました」

長谷川さんには後日談がある。日本骨髄バンクへの登録に当たって、このときはばかりは由美さんが猛烈に反対した。血縁者間移植ながら、麻酔事故が現実に来たことが報じられ、一粒種の長男が生まれたばかりとあって、夫に万が一のことがあってはたまらないという気持ちが強かったからだ。

「晩婚での第一子ですから特にそうでしょうが、目をいっぱいに見開こうとして、何かをつかもう

とするかのように手を伸ばしているのを見ると、生命の誕生って素晴らしいなって思いました。だからこそ、我が子を含めた世間の子どもたちを助けたいというのが、ぼくの信念なんです」

夫婦のあいだで大喧嘩になった。由美さんが最後に折れたのは、長谷川さんの次の言葉によってである。

「公的バンクへのぼくの登録にどうしても反対するなら、もし我が子が白血病になったとき、この子の患者登録は親権者として断固反対する」

下手をすれば離婚騒ぎにもなりかねない。東海骨髓バンクでひとりの患者に提供したのだから、それで十分ではないか、という見方もある。それなのに、こうした行動をとるには何かあるにちがいない。確かにあった。

提供してから、長谷川さんは母のてる子さん（六二）から、こんな話を聞かされた。

長谷川さんの出産は帝王切開だった。麻酔から覚めるとき普通は頭の中が空白のままだといわれるが、てるさんの場合は、頭の中いっぱい観音さまがあらわれて、ずっと見守ってくれていたという。また、二歳のころ誤って十円玉を飲み込んで胃の切開手術をするような危ない目に遭っても、無事に切り抜けてきた。てるさんは長谷川さんにこう言った。

「隆義は、生まれる前に神様と約束してきたんじゃないだろうか。アイバンクにも腎バンクにも、骨髓バンクにも、私たちが勧める前にさっさと入っていて、これまで助けてもらった命をそうすることで返すのが、神様との約束のように見える」

*

愛知県西春日井郡の会社員角田和繁さん（三九）は、九〇年に体調を崩して検査のため入院した。隣に小児病棟があつて、独身ながら子ども好きの角田さんは、白血病の子どもたちとよく遊んでいた。白血病といえは、色白の悲劇のヒロインといったイメージしかなかったのだが、子どもたちの母親から話を聞いているうちに、骨髓移植によってかなり治ることを知るとともに、輸血の大変さを教え込まれた。献血といっても、それまでは免許証の書き換えの際に数回やっただけで済んだ。ところが「ぼく自身の検査結果はなんともなかったのに、退院してすぐ献血ルームに行きました。そこに骨髓バンクのパンフレットが置いてありましたから、もらってきてその夜のうちに必要事項を書いて送りました。検査入院がなければ、献血もそう熱心じゃなかったでしょうし、バンクを知ったとしても登録はずっと後のことだったでしょうね」

提供は三次検査から八カ月もたってからだったが、これは角田さんの都合だ。

「仕事のやりくりがどうにもつかなくて、辛い患者さんの体調も安定しているということで、心苦しかったんですが待ってもらいました」

予定よりほぼ半年遅れの提供だっただけに、患者のその後が気になるところだが、十代で移植を受けた患者は、もう二十代になった。

採取のための入院は会社に黙っていた。出社したら社長にひどく叱られたという。

「そのときも仕事が結構忙しかったんですよ。なんで理由をちゃんと言わなかったのかって、ね。」

でも、あとになって患者さんの家族から手紙がきて、ぼく自身ホロツときましたから、同僚に見せたいです。中学生や高校生あたりの子どもを持っている女性社員はすごく感激していましたね」

中には、子どもにも読ませたいからと、コピーをとっていった主婦社員もいた。三カ月ほどして社員旅行があり、大浴場で同僚たちが採取痕をまじまじと見詰めた。

「旅行のあと、ちよつと腰をひねって会社近くの整形外科に行ったときも珍しがられました。看護婦さんが五人くらい集まってきて『これが、骨髄採取の跡なの』なんてね」

角田さんは、事故の心配はまるでしなかったという。聞いてみれば山男である。大学時代には山岳部とワンダーフォーゲル部の両方で活躍し、ワンゲルでは東海学生連盟の遭難対策委員長まで務めた。

「よく聞かれるんですよ、『山の事故は多いでしょうね』って。確かに事故はありますけど、町中を歩いていても交通事故には巻き込まれますよね。遭難救助では、ピッケルを突き刺したままとか、頭が割れたとか、そんな登山者の姿も見ていますから、全身麻酔の事故なんかは全く気になりませんでした。盲腸の手術に比べれば、絶対楽だと思います」

むしろ、心境が変化したことに驚いている様子だ。

「人の命の大切さというものを、もう一度見直すことができましたように思います。最終同意のときには、弁護士さんにずいぶん脅されて、じゃあ本当に痛いんだろうかと少しは怯えましたけど、この期に及んでやめますとは言えませぬね。実際にはこの程度のことですとひとりの命を助けることがで

きたんだから、もつと多くの登録があってもいいと感じました。個人主義のアメリカであんなに登録者がいて、団体協調が基本の日本人が少ないのはどうしてでしょう。検査入院前はぼくだって、あまり関心がなかったほうなので、えらそうには言えませんが、あれがきっかけで献血も百回を超えましたから、踏み出してしまえば楽だという気がします」

*

岐阜県本巣郡の機械加工業従業員野原豊広さん（三五）は、提供がきっかけになって、それまでの勤め先を飛び出すはめになった。

「個人経営の小売業の従業員でした。入院のために四日間休んだんですが、多少は仕事に迷惑をかけるかなという思いはありました」

それでも野原さんの頭のなかに「遊びで休むわけじゃない」という気持ちは当然あった。何よりも、経営者夫妻が、ふだんから社会福祉の大切さを口にしていた。夫妻の子どもが障害児だったからだ。

「ところが、退院してみると、骨髄液の提供は違う世界の出来事だというような受け止め方しかしてくれないんです。あれ、なんだか変だぞ、この人たちが強調してきた社会福祉だの環境保護だのは、上っ面にすぎなかったのかと、考え込んでしまったんです」

それを機に、店の将来像にも不安を感じだした。野原さんなりのビジョンを打ち明けたが、経営者は現状維持でいいという。四十歳に手の届く年齢になっていたこともあって、辞める決心をした。

その野原さんに献血を勧めたのは、妻の由美子さん（三〇）である。由美子さんは献血下限年齢の十六歳の誕生日からつづけているが、九一年三月に初めて夫妻そろって成分献血をした際、同時に東海骨髄バンクに登録した。

「せっかく登録したのに、という感じをずっと持っていましたから、適合の知らせには、登録したかきがあったという印象ですな」

夫に先に知らせがきて、献血の先輩として由美子さんはちよっぴり悔しい思いをしたらしいが、その年の年末ジャンボ宝くじを買ったというから、さすが主婦感覚である。残念ながら、こちらには当たらなかった。

由美子さんは、麻酔にかけても、先輩というよりベテランである。それまでのおよそ三年間に一千例の全身麻酔をこなしてきた。ただし、相手はベットである。自宅近くの動物病院で獣医助手を務めている。

「だから、全身麻酔なら安心だと夫に伝えたんです。もし局所麻酔なら、提供を反対したかもしれませんが」

由美子さんによれば、全身麻酔は動物も人間と変わらないという。同じように気管チューブを入れる。むしろ動物のほうが麻酔をしつかりかけないと、跳びはねたり足のツメでひっかかれたりと、大変らしい。

「お医者さんには絶大な信頼をおいていました。それよりも私が心配したのは、麻酔の覚め際に、

主人が変なことを口走らないかってことだったんです。犬なんか、麻酔から覚める瞬間にすごくほえることがあるんです、手術室でそんな調子になったら恥ずかしいなって思っていました」

病室に帰ってきてから、由美子さんはずっと手を握っていたが、野原さんは医師が握ってくれているとばかり思っていたようだ。勘違いだとわかって、由美子さんが面白いことを言いだした。

「結婚するほうが、はるかに怖いですよ。一緒に暮らし始めて、どうも相手を間違えたと思うく人が多いようですが、それに比べれば全身麻酔なんかどうってことはないと思いますね」

夫妻の出会いが、趣味のモータースポーツだっただけに、地元の若い仲間に献血の勧めはしているのだが、彼らの腰はなかなか重いらしい。

「血液センターまで行くのが面倒くさいなんて言っていますが、ぼくがあまり勧めるとすぐ骨髄移植に結びつけられることがあって、ちよつと困るんですよ。それに、どの辺を切開するんだなんて、骨髄移植について大変な誤解もしていますね。献血するつもりでできるのが骨髄移植だとぼくは思うんですが、ドナーになれるかどうかは確率の問題で、登録はしたけれど提供しないままという人のほうがはるかに多いんですよ。ほかの臓器移植のようにあまり深く考えず、もつと軽い気持ちでいいと思っています」

夫妻の自宅には、犬が二匹に猫が十数匹いる。九三年二月、東京で開かれた第七回猫の日フェスティバルのコンテスト「私の猫が日本一」に、オスのスイカ君を出場させたところ、およそ三百匹の中で優勝に次ぐ入賞に輝いた。動物好き、きわまれりだろう。

愛知県西尾市の会社員長谷博貞さん（四三）も、骨髄液の提供は献血の延長と言いきった。献血歴は、もう二十年以上にもなる。

*

「校区内に献血車がきても、町内からあまり協力する人がいない。じゃあ、って感じで始めました」ある日、趣味のパソコン通信を動かしていたら、東京の小学生がドナーを探しているというメッセージがあった。そこで、個人的にドナーになるより、バンク登録をしたほうが良いと考え、初めての成分献血と同時に東海骨髄バンクへ登録したのだ。

「ですから、骨髄移植とはなんぞやなんて全く知らないままの登録なんです。二次検査のときに詳しく聞いて、ちょっと考え込んだんですが、登録した以上はやるべきだという感じをずっと持ちつづけてきました」

家族にも告げないままだったが、提供間際になってそのままというわけにはいかない。同意書には家族の署名・捺印も必要である。

「家内は手術で全身麻酔を経験していますから、私が決めたことを納得させるようなものでしたね。お医者さんたちと話をして共通して感じたのは、みなさん『なんとか患者さんのためにお願ひします』という言い方をしないんです。患者さんの命がかかっているのに、どうしてなのかと初めはわかりませんでした。それが、いろんな本を読んで理解できたんです。ドナーあつての骨髄移植なんですね。ぼく自身、なんとなくやらんばらんを感じて提供したものですから、しきりと反省して

いるところですよ」

しかし、そう言う長谷さんでさえ、提供直後の感激はあつた。

「気持ちとしては、入院は遊び半分、静養半分で恐怖なんかありません。麻酔にしても、そう簡単にかかってたまるかと頑張っていたんですが、三回ほど深呼吸して、瞬間的に『終わりましたよ』って告げられ、何が終わったのかわからないんです。麻酔がかかったのと終わったのと、全く同時なんです。病室に帰るまで考えているうちに、『おれの骨髄液がどこへやらに運ばれて、ひとりの命が助かるんだな』と思うと、さすがに涙があふれてきました」

だから、会社では経験をほとんど口にしない長谷さんだが、提供したときの経過や感激を伝えてくって仕方ない思いに駆られている。

「パソコン通信を通して、バンク運動を広めたんですよ。シンポジウムというのは、まあ関係者のような人が集まるものでしょ。それに比べてパソコン通信は、いろんな立場の人がいますから、かえって広めるにはいいチャンスだと思っんです。全身麻酔にしたって、普通は『やってください』って頼んでも経験できるものじゃありません。移植された患者さんがすべて助かるわけではないでしょうが、こういうことって人生で味わえる一番の幸せではないでしょうか。バンクの許可をもらって、なんとか実現します」

*

岐阜県本巣郡の会社員広瀬正明さん（二八）は、九〇年から成分献血をつづけている。きつかけ

となったのは、就職の世話をしてくれた叔父の病気だ。入退院を繰り返していた叔父はその年八月、癌のため東京の病院で六十六歳で亡くなった。

「治療には、二十四歳以下の若い方のリンパ球を提供してもらっていたんです。自分としては、献血活動をする事によって、叔父のお返しができると考えたんですね」

ある日のこと。成分献血を終えて休憩していた広瀬さんは、東海骨髄バンクのパンフレットに気づいて、バラバラと目を通した。

「俳優の渡辺謙さんが薬だけで白血病を治したという話も知っていましたから、移植によって現役に復帰できる人がいるならいいなと思いましたね。提供が一生のうちにあるかどうか、ということでしたから、登録は軽い気持ちでした」

ところが、ばたばたといった感じで、広瀬さんの手続きは進んだ。二カ月ずつおいて二次、三次の検査となり、提供したのは登録してから十カ月もたっていないかった。

「この調子なら、一生に一度どころか二度、三度とあるんじゃないでしょうか」

広瀬さんは、日本骨髄バンクにも登録したから、予測どおりになるかもしれない。提供前に、こんな質問をしてコーディネーターの医師を苦笑させた。

「家族は強い反対ではなかったんですが、『おまえはどうして、そうお人好しではかなんだ』というんですね。まあ、あまり頭はよくないと自分でも思っていますから、先生に『患者さんに、提供者の性格などが移ることはありませんか』って聞いたんです」

答えは、むろん「そんなことはない」である。それよりも、広瀬さんは幼いころから動物が好きだったし、叔父と叔母の数がとても多い。登録から提供への道筋に、それは無関係とはいえないようだ。

「動物は寿命が短いから、すぐに死んでいくんですが、背中を撫でてやることくらいしかできないんで、それが悔しくて仕方なかったですね。それと、母のきょうだいも十人もいますから、亡くなっていく人が多いんです。ただ黙って死を見送っていくのは嫌なんです。でも、知識も財力もないから、せめてこういう形で協力できればという気持ちも確かにありましたね」

患者家族からの手紙を「一生の宝」にしたいという広瀬さんは独身だ。
「やがて結婚できて子どもが生まれたとして、もし子どもが反抗期か何かで親の言うことをきかない場合、この手紙を見せたいと思っています。献血はこれからもずっと『継続は力』という感じにつづけていきます」

＊

愛知県豊明市の主婦青木陽子さん(二九) 〓 仮名 〓は、十代のころから献血をつづけている。ドナー登録の直接のきっかけは、東海骨髄バンクの存在をラジオで聴いたのか、血液センターに置いてあったバンクのパンフレットを見てなのか、はっきりしない。いずれにしても、成分献血によって知っていた自らのHLAデータを添えて、九〇年初めに登録した。そのときはまだ独身だ。

「登録のとき両親に話しましたが、とくに何も言っていませんでした。提供を決めるときになって、

父は『親が賛成して万一のことがあったら、婚約相手に申し訳がたたない』と反対しました。だから、その後は説得もしていないんです。提供したことも知らないかもしれません」

三次検査が終わってから、ずいぶん慌ただしい思いをするようになった。結婚の時期と重なってしまったからだ。

「挙式前日に結婚式場の最終打ち合わせから帰ってきたら、留守番電話に『健康診断をしたいので、採取病院へ連絡するように』って入ってました。式の日も病院が休みですから連絡がとれず、新婚旅行に出かける大阪空港から電話して、健康診断と自己血採血の日取りを打ち合わせしたんです」

シンガポール旅行を楽しんで帰国した翌日に、採取病院に行った。提供はその二週間後だった。夫となる会社員の修司さん（三七）は、反対するも喜ぶも、反応している間もないほどだ。

「登録してあることは婚約中に伝えてありました。私は連絡を受けて『やったあ』という感じですが、その前に別の患者さんとの三次検査が合わなかった経験があるものですから、今度は喜んで提供したいと思っているわけです。挙式前には入籍してたんですが、適合する患者さんがいるという連絡はそれ以前ですから、いわば『魚を釣り上げる前』のときでしょ。反対したら、私が『あ、そう。それなら結婚を考え直すわよ』とでも言うと思ったんじゃないかしら、何も言いませんでした」

当日の苦しさは、腰やのどの痛みなどではなく、たばこが吸えないことだったという。あらかじめ言われていればそれなりの心構えをしたのだが、入院してから告げられたため戸惑ったという。

「だから、採取前日には隠れて吸っちゃいました。当日は目覚めてからさすがに手にしませんでしたけど、麻酔から覚めたあとの一服はおいしかったですね。禁煙するいい機会だったのに、今になると残念です」

もの見方が、ちょっぴり変化したそう。

「こんな私でも、人の役に立てたんだという意味で、おおげさかもしれませんが、自分という人間を肯定しやすくなりましたね。それまで、自分自身を卑下するようところがあったんですが、その気持ち少しは和らいだかなって思います」

夫の修司さんはドナー登録をしなかったが、提供後に褒めてくれたという。

「腰の採取痕を見て、『これは勲章だな』って言うてくれたのがうれしかったですね。私は消えずに、ずっと残っていてほしいと思っています」

*

愛知県岡崎市の会社員福原幸夫さん（四二）家族とも仮名は、十八歳のときからの献血者だ。バンク登録は妻の瞳さん（四〇）と一緒にだった。

「献血に行ったついででした。そのころは名古屋まで行ってたんですよ。実は、うちのやつの方が先に三次検査までいきました」

瞳さんは慌てた。小さな子がいて、なんとか提供は夏休みにならないかと、やきもきしたのだ。

幸か不幸か、三次検査の結果はノーだった。

「駄目といわれると、残念な気持ちなんですわね。だけど、お父さんに適合した患者さんがいたときは、第三者の立場になって、『もしも』のときを考えるようになりました」

福原さんの勤務先には三日連続休暇制度があつて、折から「厄年」に当たっていたから、厄落としの集まりにその休暇を充てようと考えていた。

「ま、提供のための入院も厄落としのようなものですから、休みを取ることに問題はありませんでした」

だが、福原さんも「働きバチ」からは逃れられなかった。麻酔から覚めかかつて、まだ夢うつつといった状態のとき、最初に口にしたのは部下への指示だった。本人は記憶にないが、瞳さんがよく観察していた。

「材料がどうした、あれをこうせいと、そんなことばかりなんですよ。麻酔が覚めたとき真っ先に思い出すのは、一番気にしていることだと聞いていましたから、私たち家族のことでも言ってくれろと思っていたのに」

瞳さんは不満顔だが、会社では大騒ぎになっていた。自動車部品を製造している会社だが、福原さんがいないあいだに出来上がった製品に、不良品が続出した。入院前の一週間も深夜までの残業がつづいていたが、退院してからも対策に追われて残業つづきとなった。が、この出来事は逆に、製造工程に福原さんがなくてはならない存在であることを示したようなものだ。

血小板が必要なときに、福原さん方には日赤血液センターから連絡が入り、夫妻が交互に出かけ

ているが、そうした親の姿は子どもたちにいい影響を与えている。三人の子どもはみんな女の子だが、長女の有香さん（一八）は、愛知県立高校三年生は、医師になるため医学部を目指している。

「父のしたことは、最初、すごいことだなと思いました。提供までは全く見ず知らずで、無関係に生活していた人と、どこかでつながっているということがすごい。人間はひとりでは生きていけない、とよく言われますが、本当にそうだと実感しました」

有香さんが目指しているのは、過疎化の進んだところや、海外ならアフリカといった地域で、そこに生活する人々と一体となった医療活動だという。

*

名古屋市緑区の会社員河合孝司さん（三五）は、自ら「硬派」というように、十代のころはずいぶん元気がよかつたらしい。家庭裁判所からの呼び出しを何回か受けた。

「血液センターが近くにあったので、ひとついいことでもしておこうかと、裁判所の帰りに寄りました。その前に、アイバンクにも入っていたんですよ。ま、悪いことをした償いでもいいでしょうか」

やがて結婚し、子どもにも恵まれて成分献血をつづけていた。血液センターで白血病の話聞いて登録した。東海骨髓バンクが発足してすぐだから、登録は早いほうだ。

「とくに子どもができてから、人の役に立てることがあればお手伝いしたいと強く考えるようになりました。子どものうちひとり言葉の障害があるんですが、私にとっては『その程度』なんです。

ドナーがいらない子どもは、命の保証がないんですから」

入院生活で予想と違っていたのは、採取後の腰の筋肉がとてつもなく痛かったことだという。

「バスケットのクラブチームで絶えず運動をしているため、普通の人より筋肉が影響を受けるらしいんですね。バスケットを再開したのは一カ月後でしたが、仕事は退院の翌日から腰を引きずるような感じでやりましたよ。あれこれ言われたくありませんから」

また、入院中に参ったのは、空腹感だった。ただでさえ、普通の人の二倍は食べる河合さんだから、採取前日からの絶食も手伝って、麻酔から覚めたあとの夕食ではとても足りない。腰の痛みが空腹感をまぎらわしてくれると期待したが無理だった。

「看護婦さんに聞いたら、階下の売店にしか売ってないというので、点滴の支柱をがらがら引きずりながら行きましたよ。時間が遅かったので、ハンバーガーしか売ってませんでしたが、四つばかり買ってきました。いやあ、うまかった」

九二年十二月に、ドナーに感謝する集いが開かれた。医師、看護婦など東海骨髓バンクの関係者が多数参加しての、いわば忘年会でもあったが、河合さんは三次会まで付き合った。カラオケスナックに残ったのは、大谷さんや歌手の刀根麻理子さんら十人ほどで、雰囲気盛り上がったころ『翼をください』の合唱となった。

骨髓バンク運動ではよく歌われる。さまざま思いがよぎってか、大谷さんが泣きくずれた。女性たちももらい泣きしながら歌はつづいたが、この情景に河合さんはいたく感動した。もうすぐ生

まれる子どもには、男でも女でも「翼」の一文字を入れようと決めたのである。

九三年一月二十一日生まれの三男は「孝翼」と名づけられた。

公的骨髓バンクによる初めての骨髓移植が、仙台市の大学病院でおこなわれたのは、孝翼ちゃんがこの世に生を受けてから一週間後の、一月二十八日だった。